保育者養成短期大学における学校生活に関する満足感の推移とその関連要因

古志めぐみ[†1]・青木紀久代[†1]・矢野由佳子[†2]
お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科[†1]・和泉短期大学 児童福祉学科[†2]

Satisfaction with School Life at Nursery Teacher Training Junior Colleges：Shifts in the Satisfaction and Factors Associated with the Shifts.

Megumi KOSHI[†1], Kikuyo AOKI[†1]and Yukako YANO[†2]
Ochanomizu University Graduate School of Humanities and Sciences[†1], Izumi Junior College Department of Child Welfare Studies[†2])

The purpose of this study is to explain satisfaction with school life and the shifts associated with it, as well as factors associated with the shifts, in order to consider how students at nursery teacher training junior colleges should be supported. A survey was conducted twice among 80 nursery teacher training junior college students, in April and October. Satisfaction with school life was assessed by studying three aspects, including (1) curriculum, (2) student support system, and (3) campus environment, to examine the relationship of each with students' on-campus friendships and vision for the future. The results from April revealed that having good relationships with friends improves satisfaction in all areas. The results from October revealed that having a vision for the future increases satisfaction with curriculum. The results also indicated that satisfaction with curriculum of April becomes a driver for satisfaction with other areas in October. Furthermore, future issues concerning student support system were discussed.

keywords：satisfaction with school life, student support, nursery teacher training junior colleges students, on-campus friendship, vision for the future

はじめに

本研究では､保育者養成を主とする短期大学（以下、保育短大と略す）における学生支援のあり方を検討するため、保育短大生の学校生活に関する満足感を明らかにする。また、学生生活の時期によって学生の抱える悩みや心理的課題が異なり（鶴田、2001）、それに伴って、学校生活に関する満足感も推移することが考えられる。そこで本研究では、学校生活に関する満足感の推移とその関連要因についても検討する。なお、本研究では、学校生活をキャンパス内での生活、学生生活を私生活も含む学生として送る生活全般とする。

問　題

近年の少子化、家族形態の多様化、地域コミュニティの崩壊などの様々な背景から、保育者の資質向上に対する社会的要請が高まっている。そして、保育所保育指針（厚生労働省、2008）や、幼稚園教育要領（文部科学省、2008）が相次いで改訂された。新たに明記されたことは、保育者が、子どものみならず地域の育児支援や幼保小連携の推進役を担うことである。このことから、保育者の役割が拡大している（青木、2007）と言える。このような保育者の資質向上の要請や役割の多様化に伴い、保育者養成校では、カリキュラムが変更され必修科目が増加するなど、以前に比べ学生の負担が増している。

保育者養成校とは、保育者を専門的に養成する教育機関であり、2年で修学する短期大学や専門学校が6割強を占める。高等教育全体における短期大学、高等専門学校の割合がわずか3割であることと比較すると、保育者養成校では2年制の形態をとるところが多い[*1]。4年制大学に比べ保育短大では、保育に関わる多種の単位を2年間で集中的に取得し、2年次では、就職活動も始まる上に、授業・実習が並行し過密なカ

Copyright 2012. Ochanomizu University. All right reserved.

リキュラムとなっている。

全国の大学では、休・退学率の増加を背景に、より一層、学生支援の取組みを充実させていくことが求められている(日本学生支援機構、2007)。各大学における学生相談室の来談学生延数をみてみると、4年制大学では増加傾向が緩やかになってきたものの、短期大学では、増加の一途を辿っている（大島・林・三川、2004;吉武ら、2010)。学生相談への相談内容は、友だちが少ない、居場所がないといった対人関係の相談が全体の60%以上を占め、増加傾向にあるという(日本学生支援機構、2010)。このような中で、学生相談室の設置率をみると、4年制大学は、9割近くにも及ぶのに対し、短期大学は6割と低い。以上のことから、短期大学における支援の取組みを充実させていくことは、喫緊の課題であろう。その際、学生が学校生活に何を求め、何に満足を感じているかということに目を向ける必要がある。特に、保育短大では保育の仕事を目指して入学してきた学生が大半であり、専門教育に特化したカリキュラムに適合する、より良い学生支援の在り方を検討していくことが望まれよう。

学校生活に関する満足感

所属する学校内の生活に関する満足感を高めることは、学生が生き生きと主体的に学ぶことにもつながる重要な要因である（高倉ら、1995；柏谷・河村、2002；大久保、2005)。しかしながら学校生活満足感の検討は、小中学生や高校生を対象としたものが多く、短大生においてはあまり見られない。従って、本研究では短大生の学校生活満足感に着目した検討を行う。先行研究の中で、大学で学校生活満足感を扱ったものは（Benesse教育開発センター、2009；国立大学法人保健管理施設協議会、2008)、学校が提供するソフト面、ハード面の両側面を包括的に捉えている。本研究でもこれらを参考に、学校が提供するソフト面である授業・カリキュラムへの満足感、学生への進路相談の充実さなどの学生支援体制への満足感、ハード面である施設設備への満足感や学校の居心地感を含む学内環境への満足感の3点から捉えることとする。これらの調査では学校生活満足感を包括的に捉えており、指標としては有用であるが、その調査の目的は、各大学の満足感を評価し、比較するためである。むしろ、学生の満足感を高めるためには、学生が何を必要とし、求めているのかを明らかにする必要がある。つまり、学校生活満足感への関連要因を明らかにすることが、学内における学生への支援の在り方を検討するために求められよう。安田・若杉・榊原（2007）は、教育環境との関連から学生の主観的な満足感の構成要因・関連要因を明らかにしたものの、一時点の把握にとどまる。先述したように、学生生活の時期によって学生が抱える悩みが異なり、それに伴い学校生活満足感も推移することが予想され、時期ごとの推移とそれへの関連要因を明らかにすることが欠かせないだろう。

学校生活に関する満足感とその関連要因

先述したように、学生相談へ寄せられる相談の多くが友人関係であることから、学内の友人との良好な関係は、学校生活満足感に影響すると考えられる。特に短大生は、4年制大学の学生よりサークル活動が少なく入学式の時期を逃すと新しい友人を作る機会が少ない。そのため、短大生にとって友人グループ、中でも入学直後の友人作りが重要となる（窪内、2001)。保育短大では、クラス単位で授業を受けることも多く、クラスでの友人関係が濃密になり、その分、友人関係に関する問題が浮上しやすくなると考えられる。従って、学び合う仲間である友人との関係が良好であることは、学校での居心地の良さである学内環境への満足感や、クラス単位の授業を受けることが多いことから、授業やカリキュラムへの満足感に関連すると考えられる。

保育短大と同じく専門教育に特化したカリキュラムが行われている音楽大学生を対象に調査した佐藤(2001；2005）は、進学した際に将来展望が明確な学生の方が、学校生活満足感が高いことを指摘した。また、森田（1996）は、大学生としての意義を見いだせず、大学から離れていった学生は、将来に対しても漠然とした展望しか持てていないことを明らかにした。従って、保育短大においても、将来展望をはっきり描けているほど満足感が高まるであろう。特に将来の職につながる授業やカリキュラムへの満足感や、進路相談を行っている学生支援体制への満足感と関連すると考えられる。

鶴田（2001）は、4年制大学の学生相談に寄せられる相談内容を検討し、学生期（安藤、1991）を時間軸に沿って入学期、中間期、卒業期の3つに区分した。入学期は入学後1年間、中間期は2年次及び3年次、卒業期は、卒業前1年間とされ、各時期に学生が抱きやすい悩みや心理的課題が異なるとされる。入学期は、今までの生活からの分離と新しい生活環境への適応が課題となり、友人や教師など新し

い人間関係を構築していく悩みが中心となる（鶴田、1995；Margolis、1989）。中間期は、将来の目標に向かって前進する側面と、無気力やスランプという後退する側面とがある中で、揺れ動く時期である（鶴田、1995；Grayson、1989）。卒業期は、進路決定を前に今までの人生を振り返り、「もうひとつの内面的世界の卒業論文」に取り掛かる時期である（鶴田、1994；1995）。中でも鶴田（1998）は、学生の心理的成長にとって、中間期が大きな意味をもつことを指摘した。窪内（2001）は、これらの知見を短大生に当てはめている。そして、短大生にとっての中間期は夏休みが終わった1年次の後期からであろうと指摘した。従って、本研究では入学期である入学直後の4月と中間期の始まりである1年次の10月の2時点で学校生活満足感を検討する。各時期の心理的課題の特徴から、入学期では友人関係の良好か否か、中間期では将来に対し明確な展望を抱けているかどうかが、特に満足感に影響するであろう。また、新しい環境へ適応が重要とされることから、4月の学校生活満足感が高いほど、その後の学校への適応も良好となり、満足感が高まると予想される。

以上より、本研究では、学校生活満足感と学内の友人関係、将来展望との関連、及び、学生生活の時間軸に沿って、入学期・中間期の満足感がどのように推移するかについて検討する。

目　的

本研究では、保育短大生への学生支援を考える際に重要な学校生活に関する満足感に着目し、満足感の推移とそれへの関連要因を検討することを目的とする。そのために、次の2点を検討する。①入学期の4月と中間期の10月での学校生活に関する満足感の推移及び、各時期の満足感と関連する要因の検討②入学期の満足感及び、友人関係と将来展望が中間期の満足感をどの程度予測するか、その特徴を検討する。また、満足感への関連要因・予測要因の仮説は以下の通りである。

仮説Ⅰ）友人関係の良好さは、授業・カリキュラムへの満足感、学内環境への満足感の高さに関連する。

仮説Ⅱ）将来について明確な展望を持てていることは、授業・カリキュラムへの満足感、学生支援体制への満足感の高さに関連する。

仮説Ⅲ）入学期は、友人関係の良好さが、中間期は将来展望の明確さが学校生活に関する満足感の高さに関連する。

仮説Ⅳ）入学期の学校生活に関する満足感は中間期の満足感を予測する。

方　法

手続き

保育短大A校に通う短大1年生97名を対象に質問紙調査を3回に渡って実施した。なお、本研究の分析では、全回に回答が得られた80名（男性8名、女性72名;平均年齢18.44歳、*SD*=1.32）を対象とする。

調査時期は、学校生活に関する満足感は、入学後のX年4月と、半年後のX年10月の2度、学内友人関係は4月、将来展望は6月に実施した。回答量に対する調査対象者の負担を加味し、時期を分けて行った。

調査実施にあたっては、同一科目の講義内に行い、初回は、筆者らが調査票の配布と回収を行い、初回以降は、協力校の担当教員に配布と回収を依頼した。

倫理的配慮について

質問項目は全て、調査協力校で了承された項目を採用した。調査実施においては、調査対象者に対し、協力校の担当教員と共に筆者らが直接調査の趣旨を説明し、調査の協力を依頼し、承諾を得た学生のみを対象とした。また、質問紙は初回のみ記名式で行い、それ以降はID番号の記入を求めた。分析の際、個人名が容易に特定されないよう配慮し、データの管理は、鍵のかかる保管庫にしまい専用のPCのみで分析を行った。

質問内容

学校生活に関する満足感:学校生活満足感尺度（安田・若杉・榊原、2007）や、Benesse教育開発センター（2009）、国立大学法人保健管理施設協議会（2008）の学校満足感について尋ねた項目を参考にした。また、保育短大用に関東圏内の保育短大16校のホームページより各校の特徴や理念を参考に筆者らが作成した。具体的な項目として、ⅰ）授業・カリキュラム:「積極的に参加したいと思う授業がある」など、4項目　ⅱ）学生支援体制：「先生に質問したり、相談したりしやすい」など5項目　ⅲ）学内環境：「図書館やコンピュータ室が充実している」など4項目の計13項目である。学校に対してどのように感じているかという教示のもと回答を求めた。

学内友人関係：安田・若杉・榊原（2007）を参考に、短大生の使用を前提に項目を作成した。学内の友人関係に限定して回答を求め、「将来について話合える友人がいる」など4項目から成り立つ。

将来展望：「将来展望」に関する白井（1994）と山田・岡本（2008a、2008b）を参考にして筆者らが作成した。「将来自分が何をしたいかという目標を持っている」など5項目から成り立つ。

なお、それぞれ質問項目について、「全くあてはまらない；1」から「とてもよくあてはまる；5」の5件法で測定し、逆転項目は処理し、各項目を単純加算し平均したものを尺度得点とした。

分析方法

本研究では、入学期の4月と中間期である1年次の10月の2時点における学校生活満足感の個人内推移を検討するため、各下位尺度において対応のあるt検定を行った。また、推移の関連要因を検討するため、中間期の学校生活満足感を基準変数とした階層的重回帰分析を行った。はじめに、基本的属性のみを説明変数として、それらの学校生活満足感に対する効果を確認した（モデル1）。次に、基本的属性を共変量とした上で、入学期の学校生活満足感の各下位尺度得点を説明変数としたモデル（モデル2）により、入学期の満足感からの効果を検討した。さらに、モデル2に学内友人関係、将来展望を加えたモデル（モデル3）により、これら2変数からの効果を検討した。説明変数の追加に伴う決定係数の上昇（ΔR^2）を合わせて検討することで、加えた変数の効果を確認した。

なお、分析には、SPSS21.0を使用した。

結　果

学校生活に関する満足感の尺度検討

学校満足感尺度の各下位尺度に対し、それぞれ主成分分析を行い、一因子性を確認した。さらにそれぞれの内的整合性を確認するため、信頼性係数を算出した。その結果、「授業・カリキュラム」では、4項目全てが第1主成分にまとまり、因子負荷量は全ての項目で.50以上、4項目での分散説明率は58.07%であった。また、信頼性係数は α ＝.73であった（Table1）。「学生支援体制」では、5項目全てが第1主成分にまとまり、因子負荷量は全ての項目で.50以上、5項目での分散説明率は52.90%であった。信頼性係数は α ＝.77であった（Table2）。「学内環境」では、4項目全てが第1主成分にまとまり、因子負荷量は.50以上、4項目での分散説明率は63.24%であった。信頼性係数は α ＝.80であった（Table3）。

いずれの下位尺度においても、一因子性が確認され、十分な内的整合性を有すると考えられる。

Table 1 授業・カリキュラム下位尺度の主成分分析結果と α 係数

授業・カリキュラム（α =.73）	負荷量
実践的な授業が行われていている	.84
専門的な知識や技術を学べる	.81
積極的に参加したいと思う授業がある	.75
興味のある授業を選択することができる	.63
分散説明率	58.07%

Table 2 学生支援体制下位尺度の主成分分析結果と α 係数

学生支援体制（α =.77）	負荷量
進路支援サービス（就職セミナー・ガイダンス）が充実している	.80
資格を取得できる制度が整っている	.77
先生に質問したり、相談したりしやすい	.76
学生相談を利用しやすい	.73
特待生制度や奨学金制度など経済的な支援がある	.55
分散説明率	52.90%

Table 3 学内環境下位尺度の主成分分析結果と α 係数

学内環境（α =.80）	負荷量
学内に、空き時間や放課後に過ごす居場所がある	.85
専門的な学習を行える設備（ピアノ練習室など）が整っている	.84
図書館やコンピュータ室が充実している	.83
キャンパスの雰囲気が気に入っている	.64
分散説明率	63.24%

学校生活に関する満足感の推移

まず、入学期の4月と中間期の10月の2時点における学校生活満足感の下位尺度間の関連を検討するため、相関を算出した（Table4）。その結果、4月の「学内環境」と10月の「授業・カリキュラム」との相関以外の下位尺度間で有意な正の相関が見られた。特に、同時期の「学生支援体制」と「授業・カリキュラム」や「学内環境」との間には他よりも高く、中程度の正の相関が見られた（4月：r=.53、；r=.69、10月：r=.60；r=.63、全て p<.001）。

次に、2時点における学校生活に関する満足感の各下位尺度の個人内推移を検討するため、対応のあるt検定を行った（Table 5）。その結果、学校満足感の各3下位尺度全てで、入学時の4月の方が有意に高い得点を示した（授業・カリキュラム：t(79)=6.32、p<.001、学生支援体制：t(79)=3.55、p<.001、学内環境：t(79)=3.27、p<.01）。

Table 4　4 月・10 月の学校生活に関する満足感の下位尺度間相関

		4月（入学期）			10月（中間期）	
		授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ	学生支援体制	学内環境	授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ	学生支援体制
4月	授業・ｶﾘｷｭﾗ	—				
	学生支援体	.53 ***	—			
	学内環境	.36 ***	.69 ***	—		
10月	授業・ｶﾘｷｭﾗ	.50 ***	.28 *	.16	—	
	学生支援体	.37 ***	.43 ***	.33 **	.60 ***	—
	学内環境	.28 *	.28 *	.39 ***	.52 ***	.63 ***

p<.001*** , p<.01** , p<.05*

Table 5　学校生活に関する満足感の時期別平均値と *SD* および対応のある t 検定

	4月（入学期）		10月（中間期）		
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*t*値
授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ	3.96	0.59	3.46	0.79	6.32 ***
学生支援体制	3.74	0.59	3.46	0.70	3.55 ***
学内環境	3.98	0.72	3.67	0.80	3.27 **

p<.001*** , p<.01**

Table 6　各尺度の項目内容と平均値、*SD* および α 係数

	項目内容	平均値	*SD*	α 係数
学内友人関係	将来について話合える友人がいる	4.02	0.89	.80
	学年を超えた付き合いができる			
	悩み事の相談に乗ってくれる学内の友人がいる			
	仲がよいクラスの友人がいる			
将来展望	将来自分が何をしたいかという目標を持っている	3.72	0.76	.75
	将来の職業（専業主婦も含む）について考えている			
	将来のためを考えて、今から準備していることがある			
	人生設計を立てて、今後の生活を送っていきたいと考えている			
	将来のことはあまり考えたくない（R）			

学校生活に関する満足感と各尺度との関連

まず、「学内友人関係」、「将来展望」の各尺度の平均値、および *SD* を求めた。また、各尺度の内的整合性を検討するため、信頼性係数を算出した。その結果、どちらの尺度も十分な値が得られ、内的整合性を有すると考えられた（Table6）。

次に、2 時点ごとに学校生活に関する満足感の下位尺度と、「学内友人関係」、「将来展望」間の相関係数を算出した（Table 7）。4 月、10 月のいずれの時期の「学生支援体制」、「学内環境」ともに「学内友人関係」との間に有意な正の相関を示した（学生支援体制: r=.44、p<.001；r=.30、p<.01、学内環境 r=.59、p<.001；r=.33、p<.01）。その一方で、授業・カリキュラムについては、「学内友人関係」と有意または有意傾向を示し（r=.34、p<.01；r=.18、p<.10）、「将来展望」と有意な正の相関を示した（r=.23、p<.05；r=.34、p<.01 ）。

学校生活に関する満足感の推移に関連する要因

入学後半年の時期である 10 月の学校満足感の各 3 下位尺度得点を基準変数とした階層的重回帰分析を行った（Table8）。

はじめに、モデル 1 として、性別を説明変数として、分析を行ったところ、各 3 下位尺度ともに有意でなかった。

Table 7　学校生活に関する満足感の下位尺度と各尺度間相関

	4月（入学期）			10月（中間期）		
	授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ	学生支援体制	学内環境	授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ	学生支援体制	学内環境
学内友人関係	.34 **	.44 ***	.59 ***	.18 †	.30 **	.33 **
将来展望	.23 *	.06	.11	.39 ***	.19 †	.17

p<.001*** , p<.01** , p<.05* , p<.10†

Table 8　10 月の学校満足感の階層的重回帰分析

	10月（中間期）								
	授業・ｶﾘｷｭﾗﾑ（β）			学生支援体制（β）			学内環境（β）		
	ﾓﾃﾞﾙ1	ﾓﾃﾞﾙ2	ﾓﾃﾞﾙ3	ﾓﾃﾞﾙ1	ﾓﾃﾞﾙ2	ﾓﾃﾞﾙ3	ﾓﾃﾞﾙ1	ﾓﾃﾞﾙ2	ﾓﾃﾞﾙ3
性別[a]	.11	.13	.07	.18	.15	.14	.16	.12	.12
授業ｶﾘｷｭﾗﾑ(4)		.51 ***	.43 ***		.22 †	.18 †		.20 †	.16
学生支援体制(4)		.04	.09		.26 †	.28 †		−.09	−.08
学内環境(4)		−.08	−.11		.04	−.03		.35 *	.28 *
学内友人関係(4)			.02			.11			.13
将来展望(6)			.29 **			.09			.06
R^2	.01	.27 ***	.35 ***	.03	.24 ***	.25 ***	.03	.19 **	.20 **
ΔR^2		.23 ***	.07 *		.20 ***	.02		.16 **	.01

p<.001*** , p<.01** , p<.05* , p<.10†
β：標準偏回帰係数
[a]0=男性、1＝女性

次に、モデル 1 で投入した性別からの効果を調整した上で、入学期の 4 月の学校生活満足感の各 3 下位尺度得点からの予測を検討した（モデル 2）。その結果、「授業・カリキュラム（10 月）」では、「授業・カリキュラム（4 月）」（β=.51、p<.001）のみが有意に予測した。また、この変数は、モデル 1 からモデル 2 への決定係数の上昇に有意な寄与を示した（ΔR^2 = .23、p<.001）。同様に、「学生支援体制（10 月）」では、「授業・カリキュラム（4 月）」、「学生支援体制（4 月）」（β=.22、p<.10；β=.26、p<.10）の予測が有意傾向となった。また、これらの変数は、モデル 1 からモデル 2 への決定係数の上昇に有意な寄与を示した（ΔR^2 = .20、p<.001）。「学内環境（10 月）」では、「学内環境（4 月）」（β=.35、p<.05）が有意に予測し、「授業・カリキュラム（4 月）」（β=.20、p<.10）の予測が有意傾向となった。また、これらの変数は、モデル 1 からモデル 2 への決定係数の上昇に有意な寄与を示した（ΔR^2 = .16、p<.01）。

さらに、モデル 2 で用いた全ての変数と、「学内友人関係」、「将来展望」を説明変数とし、検討した（モデル 3）。その結果、「授業・カリキュラム」では、「将来展望」（β=.29、p<.01）が有意に予測した。また、この変数は、モデル 2 からモデル 3 への決定係数の上昇に有意な寄与を示した（ΔR^2 = .07、p<.05）。一方「学生支援体制」、「学内環境」では、これらの 2 変数からの予測は有意ではなく、モデル 2 に対するモデル 3 の決定係数の上昇率も有意な寄与を示さなかった（ΔR^2 = .02、n.s.；ΔR^2 = .01、n.s.）。

モデル 3 における 10 月の学校生活満足感下位尺度得点に関連した要因を Figure 1 に示す。

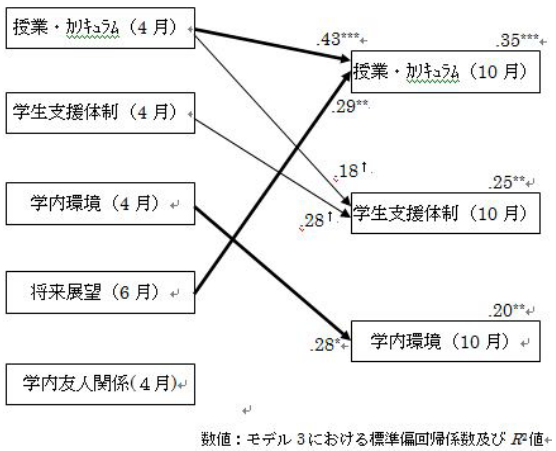

Figure 1　10月の学校生活に関する満足感の階層的重回帰分析

考　察

保育短大生の学校生活に関する満足感の特徴

入学期の4月の学校生活満足感の各下位尺度得点を見ると、3下位尺度全てで満足感は高く。中でも、「授業･カリキュラム」と「学内環境」が非常に高かった。4年制大学生を対象に調査した安田・若杉・榊原(2007)や奥田ら(2010)よりも総じて高い結果であった。これは、希望の学科に入学した学生は、そうでない学生よりも満足感が高いという指摘（小塩･願興寺･桐山、2008）と合致していた。つまり、保育短大生の大半が志望動機を持って入学してくることが満足感の高さにつながっていたと推察される。

中間期である10月では、全ての3下位尺度で有意な低下がみられた。これは、短期大学の1年生、2年生に横断調査を行った研究（日本私立短期大学協会学生生活委員会、2011）とほぼ同様の結果となり、個人内においても同様な推移が見られることが示された。入学期には、学校生活への期待が含まれ、入学半年後の満足感は実際の学校生活を送った、より学生の実感に即した満足感の結果が表れていたと考えられる。一方で、先の調査では、学生支援体制に相当する項目の満足感のみ2年生の方が高い結果であった。2年次になると実習や就職活動が本格的に始まるといった学生生活の変化に伴い、先生に相談することが増え、満足感も増加したと考えられる。本研究では、より細かく時期の変化を捉えたことにより、学生支援体制への満足感は常に高まるばかりではなく、中間期の始まりでは他の領域同様、一時的に低下することが示唆された。

以上より、保育短大生の学校生活満足感の特徴として、全体的に満足感が高いこと、中間期になると実感が伴った、より実際の満足感が反映されることが示唆された。

保育短大生の学校生活に関する満足感に関連する要因

学校生活満足感に関連する要因を検討したところ、入学直後の学内友人関係の良好さは、3下位尺度全ての満足感の高さと関連することを示した。特に「学内環境」への満足感との関連が強く「授業・カリキュラム」では、中間期ではその関連が弱まったものの入学期ではある程度、関連が見られ、仮説Ⅰを支持した。また、将来を明確に展望できていることは、4月、10月の「授業・カリキュラム」への満足感の高さと関連は示したが、「学生支援体制」との関連は示されず、仮説Ⅱの一部を支持した結果となった。さらに、入学期では、友人関係の良好さが3下位尺度全ての満足感の高さと関連を示した。中間期では、「授業・カリキュラム」への満足感のみではあったが、将来展望が明瞭であることと関連を示し、仮説Ⅲを支持した。

以上のことより、友人関係の良好さは学校生活全体の満足感を高め、入学期だけでなく半年後の学校生活満足感にも関連性があったことから、保育短大の特徴として友人関係の重要性が示唆された。また、専門教育に特化したカリキュラムが行われている大学の特徴として予想されたように、授業への満足感は将来展望が明確であるほど高く、その関連は入学当初から見られ、次第にその関連が強まることが明らかになった。これは、佐藤（2001；2005）の音楽大学の学生を対象とした研究と一致する結果であり、保育短大生も将来を見据えて入学してくる学生が多いためであると推察する。加えて、授業への満足感は、入学期では学内友人関係の良好さが関連した。従って、入学期ほど、一緒に授業を受ける仲間との関係が良好であることが満足感につながるものの入学期以降弱まり、次第に学生個人がいかに将来展望をもっているかが関連すると考えられた。しかし、予想された中間期であっても、将来展望とその他の満足感との関連は見られなかった。これは、1年生を対象としていることが関連すると考えられる。将来を考え始める中間期に調査を実施したとは言え、入学期から中間期への移行の時期であり、今後、卒業が近づくにつれ関連が強まることが予想される。

入学時から半年後の学校生活に関する満足感の推移を予測する要因

中間期の学校生活満足感を予測する要因を検討したところ、いずれの３下位領域においても入学期の満足感が中間期の同領域の満足感を予測することが示され、仮説Ⅳを支持した。この結果は、新しい環境への適応が課題となる入学期がいかに重要であるか実証された。中でも、授業やカリキュラムへの満足感では、入学期の満足感によってその後の同領域の満足感を大きく規定し、さらに中間期の「学生支援体制」への満足感を高めることが明らかとなった。このことから、保育短大生にとって授業への満足感への意味づけは大きいと考えられた。また、将来展望の明瞭さは、「授業・カリキュラム」への満足感の高さと関連するだけでなく、高める要因となることが実証された。一方で、「学生支援体制」、「学内環境」では、学内友人関係と、両時期ともに関連があったものの、中間期の満足感を高める予測要因とはいえなかった。入学期の満足感が中間期の同領域の満足感を高めることから、入学当初に学内の友人と良好な関係が築けることはその後も重要であろう。しかし、両領域とも学内友人関係や将来展望からの影響が見られず、今後、学生支援体制や学内環境への満足感を予測する要因の検討が求められる。

保育短大における学生支援体制への示唆

本研究では、入学期の学校生活満足感がその後の満足感を予測することが実証された。大学の入学期では、その学生の課題が表面化し不適応となりやすい時期（鶴田、2010）だが、保育短大生は、授業数も多く、大半が必修科目で自由度が低い。そのため、一度立ち止まると取り戻すことが難しく、挫折感や大きな失敗体験となりやすい。そして、それを引き金に不登校や退学へとつながる可能性も大きいと考えられる。大学の学生生活へスムーズに移行するために、入学後早期からアプローチすることが重要であり、特に、学友との関係を築ける機会を設けることが重要である。具体的には、様々な場面で自己紹介をするワークや共に行う作業を取り入れ、学生同士が知り合える機会を増やすことが有用であろう。また新入生向けの入学前授業は、入学の前に友人関係を築ける場としても活かされるであろう。さらに、年長学生によるピア・サポートを活用することも学生間の関係を促進するためにも役立つと考えられる。また、入学期における不適応を予防するために、導入教育を小人数で行ったり、教員よる個別相談機能を強化したりする取り組みが行われている。これらは、入学期の適応を促進するだけでなく、その後の学校生活への満足感を高めることが示唆された。

また、入学期の授業やカリキュラムへの満足感が高いほど、その後の他領域の満足感をも高め、さらに、将来展望が高いほど中間期の授業やカリキュラムへの満足感が高まることが実証された。つまり、将来のために必要だ、役立つと実感できることは、授業への満足感や学校全体の満足感を高めるためにも求められる。そのためにも学生が将来を考えられるような機会を設けるなどのキャリア教育が重要である。特に、専門教育に特化したカリキュラムが行われている保育短大では、入学早期からそれらの活動を取り入れていくことが有用であろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、保育短大１校の保育短大生を対象としている。その大学では、保育の専門教育に特化したカリキュラムが行われていることに加え、ミッション系の学校という特色を有している。今後は他の保育短大、さらには、他領域の専門教育大学に対象を広げ検討していくことが今後の課題である。

また、学校生活満足感との関連要因として、本研究では、学内の友人関係、将来展望を取り上げた。これらは、学校生活満足感と関連はあるが、十分に予測する要因とはいえなかった。今後は、ソーシャル・サポートなどとの関連を検討し、満足感を高める要因を検討することが求められよう。

＜付記＞本論文の作成・尺度の使用について、愛知淑徳大学の安田恭子先生に、格別のご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、本研究は、研究者らが行う短大学生指導部との協働研究プロジェクトの中で行われました。調査にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝いたします。

注

1）数値は、厚生労働省の調べによる平成24年４月１日現在における指定保育士養成校数

参考文献

安藤延男（1991）「座談会：キャンパスと学生相談の役割」『現代のエスプリ』293，５－30.

青木紀久代（2007）「キャリア発達とその支援」

pp.165-177. 青木紀久代編（2007）『発達心理学――子どもの発達と子育て支援』みらいに所収.

Benesse教育研究開発センター（2009）「大学生活について」『大学生の学習・生活実態調報告書』51，http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/pdf/data_06.pdf （2013年2月18日閲覧）

Grayson, P. A.（1989） The college psychotherapy client. pp.8-28. In Grayson, P. A.& Cauley, K. (Eds.) (1989) ”College psychotherapy” The Guliford Press.

粕谷貴志・河村茂雄（2002）「学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点――学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討」『カウンセリング研究』35(2)，116-123.

国立大学法人保健管理施設協議会（2008）『学生の健康白書2005』http://www.healthcarecenter.osaka-u.ac.jp/kyougikai/06_files/hakusho2005.pdf （2013年2月18日閲覧）

厚生労働省（2008）『保育所保育指針』http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1221-8a.pdf（2013年2月18日閲覧）

厚生労働省（2012）『指定保育士養成施設一覧』http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku_youseikou.pdf （2013年2月18日閲覧）

窪内節子（2001）「短期大学生の学生生活」pp.155-167. 鶴田和美編（2001）『学生のための心理相談――大学カウンセラーからのメッセージ』培風館に所収

Margolis, G. Developmental opportunities. pp.71-91. In Grayson, P. A.& Cauley, K. (Eds.) (1989) ”College psychotherapy” The Guliford Press.

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf （2013年2月18日閲覧）

森田裕司（1996）「大学中途退学者のアイデンティティ形成に関する研究」『広島経済大学研究論集』19(1)，71-98.

日本学生支援機構（2007）「大学における学生相談体制の充実方策について――総合的な学生支援と専門的な学生相談の連携・協働」http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/documents/jyujitsuhosaku_gaiyo.pdf （2013年2月18日閲覧）

日本学生支援機構（2010）「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援取組状況に関する調査（平成22年度）」http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/torikumi_chousa.pdf（2013年2月18日閲覧）

日本私立短期大学協会（2011）「学生生活に関する調査報告書」http://www.tandai.or.jp/kyokai/15/archives/pdf/22nen%20chousahoukokusho.pdf（2013年2月18日閲覧）

大久保智生（2005）「青年の学校への適応感とその規定要因――青年用適応感尺度の作成と学校別の検討」『教育心理学研究』53(3)，307-319.

奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田裕子（2010）「大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』9，1-14.

大島啓利・林昭仁・三川孝子（2004）「2003年度学生相談機関に関する調査報告」『学生相談研究』24(3)，269-304.

小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2008）「中部大学新入生の学科選択満足度の分析――入学年度、学部、学科による比較と影響要因の検討」『中部大学教育研究』8，7-13.

佐藤典子（2001）「音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について」『教育心理学研究』49(2)，175-185.

佐藤典子（2005）「音楽大学への進学理由と進学後の適応に影響を与える諸要因の検討――音楽経験と家庭の音楽環境および家族のサポートについて」『教育心理学研究，53(1)，49-61.

白井利明（1994）「時間的展望体験尺度の作成に関する研究」『心理学研究』65(1)，54-60.

高倉実（1995）「高校生の生活満足度尺度の試作」『琉球大学教育学部紀要第一部・第二部』47，117-124.

鶴田和美（1994）「大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味――比較的健康な自発来談学生についての検討」『心理臨床学研究』12(2)，97-108.

鶴田和美（1995）「学生相談における時間の意味」『心理臨床学研究』12(4)，297-307.

鶴田和美（1998）「学生相談」pp.237-257. 下山晴彦編（1998）『教育心理学Ⅱ』東京大学出版に所収.

鶴田和美（2001）「学生生活サイクルとは――入学期の特徴」pp.2-23. 鶴田和美編（2001）『学生のための心理相談――大学カウンセラーからのメッセージ』培風館に所収.

鶴田和美（2010）「学生生活サイクル」pp.34-40. 日本学生相談学界50周年記念誌編集委員会編（2010）『学生相談ハンドブック』学苑社に所収.

山田みき・岡本祐子（2008a）「「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成」『広島大学心理学研究』8，89-98.

山田みき・岡本祐子（2008b）「「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ――対人関係の

特徴の分析」『発達心理学研究』19(2), 108-120.
安田恭子・若杉里実・榊原國城（2007）「大学生の満足感と教育環境要因」『コミュニティ心理学研究』10(2), 175-185.
吉武清實・大島啓利・池田忠義・高野 明・山中淑江・杉江 征・岩田淳子・福盛英明・岡 昌之（2010）「2009年度学生相談機関に関する調査報告」『学生相談研究』, 30(3), 226-271.

2013年3月3日　受稿
2013年3月11日　受理